

曉寢
あさねぼう

轉枕重安寢
まくらかえして
ゆつたりにとね

迴頭一欠伸
あたまめぐらし
のんびりあくび

紙窗明覺曉
まどのあかりに
あかつきおぼえ

布被暖知春
やぐのぬくみに
はるのおとずれ

莫強疎慵性
このぐうたらに
まさるものなく

須安老大身
おいぼれのみ
かかせぬやすみ

雞鳴一獨睡
とりがなげども
きにせずねむる

不博早朝人
にどともどれぬ
あさのつとめは

曉寢

枕を転じて重ねて安寝し、頭を迴らして一たび欠伸す。紙窗明らかにして曉を覚え、布被暖かにして春を知る。疎慵の性より強れるは莫く、須らく老大の身を安んずべし。鶏鳴くも一に独り睡る、早朝の人に博えず。

*これも布団にくるまった男の詩。なんとも羨ましいご身分だ。それにしても、この詩の内容のなさといったら……。杜甫の律詩などとは大違いだ。